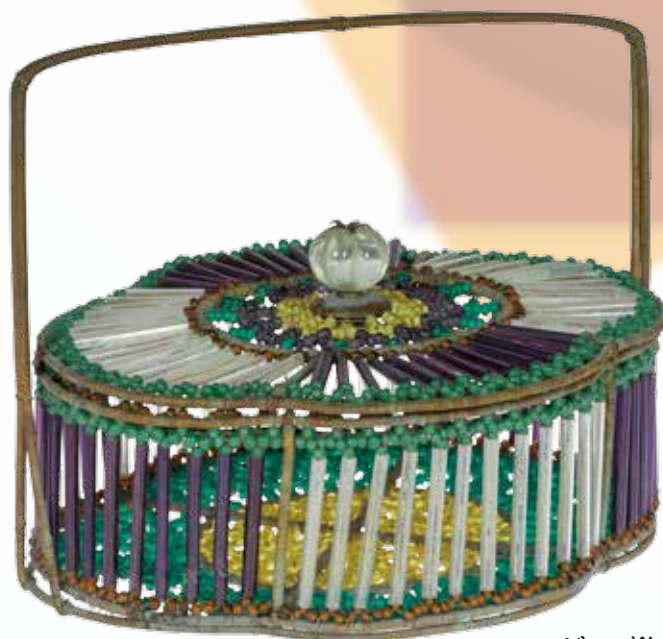


所 陵

No. 81

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



ビーズ飾り蓋付菓子器

1 合 江戸時代 (1844 ~ 1866)

● 目 次 ●

神輿を迎える家	黒田 一充	2
曾我蕭白と郷土史	村上 敬	4
全国にみられる式三番叟と各地の特徴	齋藤 冬華	6
徳山喜昭コレクション 木札について	佐藤健太郎	8
関西大学福島学舎の絵はがき	伊藤 信明	10
関西大学千里山キャンパスにおけるキャンパスミュージアム構想の展開	石立弥生子	12
新型コロナウイルス流行下における関西大学博物館と博物館実習の取り組み		14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>

神輿を迎える家

黒 田 一 充

神社の祭りで、神輿^{みゆき}が出るところは多い。渡御やお渡し、神幸と称して行列を組み、氏子の区域を廻っていく。祭神が旅をすることを考えられているため、神輿が立ち寄る場所は御旅所^{おたびしょ}とよばれる。御旅所は、村や町の広場のほか、旧社地や海浜、河原などにあり、普段は空き地だが、祭りの際に仮設の建物を設けたり、それが常設の建物になったところもある。

神輿が来ると氏子の人びとが参拝するため、一般に御旅所は、公共の場所に設けている。ところが、祭りの当番（頭屋）をつとめる個人の家に神輿を迎えるところがある。

香川県多度津町^{かずはら}の葛原正八幡宮の氏子区域は下所^{げしょ}・八幡^{はた}・北条^{きたんじょう}・大木^{おおき}の4地区で輪番に頭屋^{とうやがしら}（統家頭）を廻している。

10月第三日曜日の秋祭に先だって、9月最終日曜に宮司が来て、座敷の床の間に祭壇を設け、御幣をまつて祭神の分霊を迎える。

祭りの2日前の午後には、神社から神輿が頭屋宅へ運ばれ、広庭に安置される。渡御行列の道具類や衣裳も運ばれ、神輿の近くに並べる。翌日午後にも宮司が来て神輿を祓い、床の間の祭壇で祝詞をあげる。その夜、神社で宵宮の神事があり、獅子舞が奉納される。

当日は、朝から役をつとめる男性たちが頭屋宅に集まり、祭壇に神饌^{しんせん}を供える。渡御行列の役は4つの地区で分担するため、各担当者が道

具を受け取りに来て、昔からのしきたりでお礼の菓子パンを受け取って帰る。

準備が整うと、神輿は軽トラックに載せ、祭壇の御幣も神社へ運ぶ。石鳥居の前で台車に載せかえ、境内の石舞台と拝殿の間に安置する。



統家頭宅の座敷の祭壇

正午から神事が始まり、宮司が神輿に御神体を遷す。その前で、氏子の4つの獅子組が2番ずつ獅子舞を奉納し、大木地区にある御旅所の荒神社へ出発する。行列は昭和前期に描かれた「御神事行列図」の順番を踏襲しているが、役数は少なくなっている。途中で獅子舞を奉納しながら約2時間かかって御旅所へ着き、神事の後に本社へ帰る。

神輿を頭屋宅で用意して神社に運び、そこから神幸が始まるようにも見えるが、頭屋宅でまつっていた御幣が神輿の前に進んでいることに注意したい。

葛原地区の南西にある善通寺市中村の木熊野神社では、10月第一日曜日の秋祭に統祖^{とうそ}とよばれる5つの組から輪番に頭屋（統本）を出す。

9月下旬、統本宅の広庭に御神舎^{ごじんや}を建てる。高さ約2メートルの祠で、今は毎年同じ材を使って組み立てる。完成すると宮司が内部に御幣を安置し、この日から毎日まつられる。

2日前の午前中に、神輿を神社から運んで御神舎の横に安置し、午後には潮川^{しおかわ}神事が行われる。社前の湧き水（宮川）で頭屋たちが沐浴し、御由留輪^{おゆるわ}とよぶ桶に白米を入れて洗い、もう別の桶にも神幸時に道を浄めるための水を汲む。2つの桶は、御神舎の中に納める。



葛原正八幡宮 統家頭宅の神輿（2015年）



木熊野神社 統本宅の御神舎と神輿（2013年）

以前は桶を洗うだけで、組中から集めた玄米を翌日桶に入れて一晩まつっていたという。

氏子の獅子組があり、祭りの前に組の各家を廻る。宵宮の日には統本宅へもやってきて、御神舎と神輿に獅子舞を奉納する。

当日は神輿と御由留輪の一行が別々に出発し、御旅所の薬師堂（もとは若宮神社）で合流する。ここではじめて御由留輪を神輿に載せ、神社まで渡御して神前に白米を供える。

しかし以前は、御神舎の御幣から御由留輪に入れた玄米に神霊を遷し、それを統本が掲げて神輿の後ろを進み、御旅所に着いてから神輿内に納めていた。この玄米は前年に収穫したものとのことなので、1年間頭屋宅でまつられていた可能性もある。

さらに、幕末の記録には御神舎は座敷内に安置したとあることから、葛原正八幡宮と同じように頭屋宅でまつっていた御幣を神輿とともに神社へ戻すという祭りの構造を持っていることがわかる。



御神舎内部の御由留輪

神輿が屋外ではなく、座敷の中に安置する例が、三重県名張市滝之原の国津神社の11月第二日曜日に行われる秋祭に伝わっている。同社の氏子区域は上出・仲（中）出・下出の3つの地区（小場）で、

さらに細かい15の組が輪番で祭りの当番（頭屋組）をつとめ、その中から頭屋の家が選ばれる。

前日午前中に頭屋宅で餅つきと神饌の準備をする。日没後に神職が来て湯立をした後、行列を組んで神社へ向かう。

宵宮の神事は20時ごろから始まり、途中から拝殿前で3つの小場の獅子神楽が同時に演じられる。奉納後、22時ごろ御神体を遷した神輿が、頭屋宅に運ばれ、座敷の中にまつって神饌を供える。

調査時は頭屋宅ではなく仲出集会所を使っていたが、23時をまわって神事が終わると甘酒が振る舞われ、宵宮の儀礼は終わる。その後、頭屋は一晩中灯明を灯して神輿を守る。

翌朝10時すぎに部屋の障子が開けられ、神輿が庭に引き出される。この日は頭屋組が属する小場の獅子舞を奉納し、神輿が出発する。獅子舞や子供神輿が続き、頭屋は引き継ぎ文書の入った黒箱（玉手箱）を持って従う。調査時は集会所から最初に頭屋宅へ向かい、そこから改めて出発していた。



滝之原国津神社 座敷の神輿と黒箱（2019年）

神輿渡御は一番奥の上出に向かい、下出の神社まで帰って来る。御神体を本社に戻し、神事の途中には拝殿前では獅子神楽が奉納される。神事の終わると、社務所で氏子の戸主たちが集まった祝座が開かれ、籤で選ばれた翌年の頭屋が披露されて、黒箱の引き継ぎが行われる。

名張市内の神社でも、頭屋宅の座敷に祭壇を設けて御幣をまつり、祭りの当日に行列を組んで神社に戻す事例がある。その祭神がやって来る様子を、神輿の渡御という目に見える形で表しているのが、国津神社の祭りである。

関西大学文学部教授

曾我蕭白と郷土史

村 上 敬

はじめに

曾我蕭白（1730～1781）は、京都の画家であるが、伊勢（現・三重県）を遊歴し、この地に多くの作品を残したため、1972（昭和47）年頃までの通説として、伊勢出身の画家であると考えられていた。三重県立美術館は、1982（昭和57）年の開館以来、蕭白の作品を積極的に収集し、日本最大の蕭白画コレクションを形成した。

蕭白に注目が集まるようになったのは、この半世紀のことであり、辻惟雄氏の『奇想の系譜』（美術出版社1970）に取り上げられたのが契機とされる。それ以前は、評価の高い画家ではなかった。とくに、明治期の蕭白評には目に余るような酷評が多く、「曾我蕭白は吾等の、最も排斥すべき画家」（高野1905）という一節に始まる論考が象徴的である。

では、明治期の三重県は、蕭白をいかに評価したか。当時の三重県には、官公立の美術館、博物館、大学は存在しない。ただ、郷土史への関心と研究が最も盛んな時期であった。明治期の三重県は、郷土の画家・蕭白をいかに評価したか。

皇太子の三重県行啓

1910（明治43）年11月、時の皇太子（のちの大正天皇）の三重県行啓に際し、宿泊先である津俱樂部や、巡啓地となる各県立学校では、御座所が整備され、御座の背後には金屏風をめぐる事が取り決められていた。

金屏風は、『東宮行啓記』によると、一部は無地であったが、一部は近世期の画家による画屏風であった。すなわち、津俱樂部の便殿には尾形光琳、寢殿には土佐光起、県立工業学校には狩野永徳、そして県立高等女学校には蕭白の屏風が設えられた。

当時の『伊勢新聞』によれば、いずれの屏風も、津市内の素封家から調達された。とくに、光琳の屏風は、田中治郎左衛門の秘蔵する金屏風60余隻のなかから、県の行啓事務所が選抜した「最も優美なるもの」『伊勢新聞』（1910年11月8日）であった。

光琳、光起、永徳は、日本美術史の主たる流派の大成者であり、いわゆる巨匠である。巨匠たる面々に蕭白が特別に加えられたのは、蕭白が郷土の画家であるからに他ならない。1907（明治40）年、知事・有松英義を会長とする三重県協賛会は、『三重県事業史』を出版し、第9回関西西府県聯合共進会の会場で頒布した。『三重県事業史』は、県内の各種事業を紹介するなかで、近世期の画家としては唯一、蕭白を取り上げている。そして、蕭白は「伊勢松坂の人」と紹介され、「当時の名手なり」と評価されている。

もっとも、このような蕭白に対する好意的な評価は、当時の記録によれば、行啓や共進会などの対外的な催事に限定されている。おそらく、県は、県内に多数遺存する蕭白画に美術品としての価値づけを図ったと考えられる。

三重県教化史料展覧会

前述の行啓において、三重県庁も巡啓地の一つであり、県庁には「教化史料展示室」（写真）が特設され、近世期の書画が台覧に供された。展示品は、鴨川井特筆《本居宣長像》、増山雪斎筆《虫豸帖》など計42点であるが、ここに蕭白画は1点も含まれていない。

「教化史料展示室」の展示品は、1910（明治43）年8月に県立第一中学校で開催された「三重県教化史料展覧会」（以下「教化展覧会」）の出品物から、三重県教育会が選抜した「最も趣味ある遺墨」『伊勢新聞』（1910年11月7日）である。

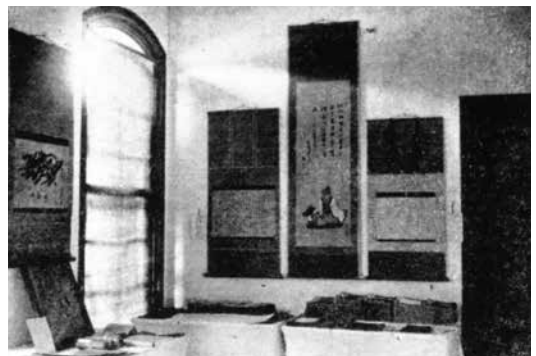


写真 教化史料展示室（三重県庁 蠶絲課室）

「教化展覧会」の開催は、県師範学校長・相沢英次郎の発案による。相沢は、県内公立学校長の総代であり、また官民一体の教育外郭団体・三重県教育会の理事として、会長たる知事に次ぐ立場にあり、県の教育行政における事実上の主宰者であった。そして、相沢が最も重視したのは、人格教育であった。

相沢の教育理念については、佐々木仁三郎の著書（1992）に詳しい。相沢は、ペスタロッチ（J.H. Pestalozzi）の追慕記念祭を開くなど、実物教授法を標榜し、人格教育のために、郷土先人の遺物遺品を教材として用いた。

相沢が発案した「教化展覧会」は、県教育会の主催事業となり、県内全ての郡市教育会が協力し、県内の社寺、個人から鳩集された1,480点に上る近世期の書画、典籍が展示された。このような展覧会は、他府県にも前例がなく、内務省から視察官が派遣された。

「教化展覧会」の出品目録（伊賀市上野図書館蔵）は、膨大な出品数を反映し、36頁に及ぶ。出品物のうち、絵画の作者は、月僊、岡田米山人、十時梅屋、増山雪斎、岡野石圃など、郷土の画家がかなり広範に扱われている。一方で、1,480点中、蕭白画は1点もない。蕭白画が伝来する寺院も、蕭白画以外の所蔵品を出品している。おそらく、蕭白画は「教化史料」ではないため、つまり蕭白は模範的人物ではないため、排斥されたのではないか。

蕭白の人物像について、県内に伝わる数々の逸話によれば、不遜な性格で、奇矯な行動を取る人であった。明治期の美術史家が蕭白を誹り、「最も排斥すべき画家」という烙印を押した背景にも、この不徳な人物像があった。

先賢遺芳

「教化展覧会」は、会期が7日間と短かったが、3,704名の観覧者が訪れた。また、「教化展覧会」の内容は、閉幕後に制作された出版物により、一層普及された。

県教育会は、「教化展覧会」の後、出品物1,480点の中から70余点を選抜して、写真撮影を行った。目的は、郷土人物誌の編纂である。そのため更に、相沢は、自校生徒に長期休暇の課題として、郷土先人の事績を調査させた。『三重県郷土誌』43巻43冊（三重大学附属図書館蔵）

は、この調査の成果である。これらの成果をもとに、県教育会は、1913（大正2）年に改めて陳列会を行ったが、この時点では予算が付かず、人物誌の出版には至らなかった。

1915（大正4）年7月、前年に知事に就任した馬淵鋭太郎は、大正天皇の大礼記念事業として、人物誌『先賢遺芳』を出版し、同年11月に伊勢神宮を行幸する大正天皇へ献上する計画を立てた。

『先賢遺芳』は、6,000円という多額の予算が割り当てられ、県教育会に編纂が付託された。県教育会は、県師範学校長以下10名からなる編纂委員会を設け、「教化展覧会」の出品物を基礎として、『先賢遺芳』を完成させた。

編纂委員会から史料調査を任じられた橋本唯三郎の書簡（海上保安庁蔵）によれば、『先賢遺芳』出版の目的は、「上は天覧、下は郡市町村に頒ちて、後進の亀鑑とする事」であった。実際に、『先賢遺芳』は、1,500部出版され、県内の公立学校、図書館などに広く頒布された。

『先賢遺芳』が取り上げた郷土先人の多くは、藩主や僧侶などである。よって、図版掲載された絵画は、いわゆる「文人大名」や「画僧」による作品が多い。職業画家も取り上げられているが、寺子屋の普及に貢献した野村訥斎であり、作品の良し悪しよりも、作者の人格に重きが置かれた撰述であった。

おわりに

『先賢遺芳』に採録されたか否かは、その後の郷土の画家に対する評価に影響を与えた。大野和平の『隠れたる画家 野村訥斎』（1919）は、『先賢遺芳』の4年後に出版されたが、書名の通り、「隠れたる画家」が『先賢遺芳』を契機に再評価された例である。また、『先賢遺芳』が示した先人評価は、根強く残り、1956（昭和31）年に上野市立図書館が開催した「先賢遺芳展」は、その徴証である。反面、蕭白は、美術史のみならず、郷土史においても、長らく不遇な画家となった。

【参考文献】

- 高野涼堂 1905「曾我蕭白に就て」『日本美術』第75号
- 三重県庁 1912『東宮行啓記』
- 三重県 1928『御巡幸紀要』
- 佐々木仁三郎 1992『近世郷土の教育先賢 根本貞路・阿保友一郎・相沢英次郎』三重県良書出版会

三重県立美術館学芸員

全国にみられる式三番叟と各地の特徴

齋 藤 冬 華

翁が登場する民俗芸能には、奥三河の花祭りなどの能楽より古い形態が残るものと、能楽の演目「翁」ができた後に民俗芸能化したものがある。後者の一つとして「式三番叟」と呼ばれるものがある。これは能楽の「翁」と同じく、千歳、翁、三番叟の三役が登場する3つの場面で構成されている。

式三番叟は翁と地謡の掛け合いから始まり、千歳の舞、翁の舞、三番叟が面をつけずに舞う揉の段と続く。それが終わると三番叟は面をつけ、鈴を持った千歳と問答をする。千歳から鈴を渡された三番叟が鈴の段を舞って終わる。

囃子は笛、小鼓、大鼓に拍子木が加わり、役者は化粧をするなど、歌舞伎の影響もみられる。化粧をするのは千歳と三番叟が多く、中には囃子方を含めた全員のところもある。



左から千歳、翁、三番叟（兵庫県香美町訓谷）

地域によっては「三番叟」、「翁三番叟」などとも呼ばれるが、三番叟という役名や三番叟だけが登場する歌舞伎の演目（三番叟もの）と区別するため、ここでは「式三番叟」に統一する。

式三番叟は全国各地に伝わっており、特に千葉県、静岡県、兵庫県のように集中している地域がある。これらの県を中心に、各地の所作や上演形態の特徴を紹介したい。

千葉県は関東で最も多い6カ所に式三番叟が伝わっており、その多くが春から夏にかけての祭りで演じられる。

房総半島の先端、南房総市には3カ所で伝わる。これらはかつて地芝居が盛んだった地域で、

同市千倉町の忽戸地区では、地芝居の冒頭に演じられていた。また、地芝居よりも古く、享保年間（1716～1736）には上演されていたとも伝えられる。

舞台上で面を扱う際には直接息をかけないよう、口に紙を挟む。こうした面の扱い方は同じ千倉町の平磯地区にも見られる。

囃子に拍子木はなく、役者は化粧をしない。三番叟は翁の舞が始まるまで舞台の中央後方に観客に背を向けて座っており、これは千葉県の式三番叟に共通している。



背を向けて座る三番叟（南房総市千倉町忽戸）

舞台は地芝居に使われていたもので、本殿の左斜め前に建っている。このように千葉県では地芝居用の舞台のほか、境内に建てた仮設の舞台や拝殿で上演される。いずれも本殿側を向かず、観客側を向いて演じている。

本殿を向かない上演形態の千葉県に対し、本殿や神輿に向かって上演するのが兵庫県の特色である。

兵庫県では、丹波地域5カ所、但馬地域8カ所の、合計13カ所で式三番叟が伝承されている。どちらも10月の初旬から中旬にかけての祭りで奉納される。

丹波地域は本殿を向いて演じられることが多い。丹波市氷上町稲畑では、階段を挟んで本殿正面に建つ割拝殿（中央が通路になっている拝殿）の通路部分に板を張り、本殿側に向かって舞台が作られる。

三番叟は速いリズムに合わせステップを踏んで舞っており、丹波地域で共通している。



跳ねるように揉の段を舞う三番叟（丹波市氷上町稲畑）

三役の事を「踏子^{ふみこ}」、舞うことを「踏む」と言い、これは同地域の佐野とも共通する。

但馬地域は、かつて地芝居をしていたところが多く、境内にある地芝居用の舞台や、仮設の舞台の前に神輿を迎えて式三番叟が奉納される。ここでも「踏子」「踏む」という言い方をする。また、但馬地域の隣、京都府丹後地域でも舞うことを「踏む」と言う。



仮設舞台の前に迎えられた神輿（兵庫県香美町香住）

地芝居がなくなって式三番叟だけが残された千葉県や、地芝居用の舞台が式三番叟に使われる但馬地域の事例に対し、現在も地芝居と一緒に演じられるのが、山形県酒田市の黒森歌舞伎である。

黒森歌舞伎は、2月15日、17日の日枝神社例祭に、拝殿横の演舞場で上演される。両日とも冒頭に獅子舞と式三番叟が演じられる。また、8月16日にも神社の拝殿で獅子舞、式三番叟だけを行う、「お面開き」がある。囃子に拍子木は入らず、「お面開き」の際には化粧をしない。

翁の舞の前に、翁と三番叟が向かい合う「対面」と呼ばれる所作がある。これは、同じ山形県庄内地方の鶴岡市山五十川に伝わる山戸能^{やまのう}の演目「式三番^{しきさんばん}」にも見られる。

また、同市鼠ヶ関^{ねずがせき}では、昭和37年に断絶するまで鼠ヶ関芝居（歌舞伎）の演目として最初に演じられ、その後は式三番叟だけが行われていたが、現在は絶えてしまった。

これまで紹介した3県と共通する上演形態や所作が見られるのが、静岡県である。



「対面」の所作（酒田市 黒森歌舞伎）

静岡県には、中絶したものも含め、全国最多の41カ所で式三番叟が伝承されていた。特に伊豆半島に集中し、10月中旬から11月にかけての祭りで奉納される。

上演形態は、拝殿で観客側を向くものや、境内の舞台や舞殿を使用して本殿を向くもの、向かないものなどが混在する。

舞の所作も様々だが、山形県で見られる「対面」の所作をするとところが複数ある。また、三番叟が後ろを向いて舞台上に座っているという、千葉県に似た形が見られるところもある。

かつて地芝居が行われていた、あるいは地芝居の冒頭に演じられていたというところは少なく、式三番叟だけが伝わっているという地域が多い。



静岡県伊豆市城山の式三番叟にも「対面」の所作がある

式三番叟は全国で広く伝わっているが、先行研究や報告は地域ごとの分析がほとんどである。しかし、詳しく各地の特徴や上演形態を比較すると、同一地域だけでなく、兵庫県但馬地域と京都府丹後地域といった隣接する地域、山形県と静岡県という離れた県にも共通点があることがわかる。

また、式三番叟が伝承されている地域には、地芝居の演目として上演されていたところもあるが、千葉県のように演目の一つだったものが、地芝居がなくなったあとも行われているなど、式三番叟は単なる演目としてだけでなく祭りに欠かせない芸能として地域に受け継がれている。

鶴岡市立藤沢周平記念館学芸員

徳山喜昭コレクション 木札について

佐 藤 健太郎

はじめに

本学の理事を務めた学友の故徳山喜昭氏蒐集の資料（以下、徳山喜昭コレクション）は、高札・看板・木札・米切手・和本・古文書などからなる。そのうち木札は70点余りを数える。

徳山氏が蒐集された木札の内容や時期（江戸時代～昭和時代）は、様々である。以下では、それらの中から4点を取り上げて、紹介する。

1.



表面に「山本利兵衛」、裏面に「禁裏御所」と書かれており、裏面には焼印が押されている。寸法は、14.5×9.6×1.8センチで、中央上部に紐通しがある。

山本利兵衛家は漆師・蒔絵師で、初代武継が1707年（宝永4）に丹波国桑田郡より京に出て学び、1714年（正徳4）に開業した。以後、子孫が代々利兵衛の名を継いで家業に従事した。

本品は、禁裏御所への出入の許可を示す御門鑑である。発給時期は不明であるが、印文の状態からみて、天保～安政年間（1830～1860）に発給されたものと思われる。同期間で活躍したのは、3代光春（1770～1838）・4代武光（？～1870）である。光春が仁孝天皇、武光が孝明天皇の即位の調度にそれぞれ蒔絵を施している。安政4年（1857）に武光が内裏常職に任ぜられていることから、本品は武光に下されたも

のと考えられる。

2.



表面に「丹波国氷上郡三原村／材木商石倉吟兵衛／住式千八拾八番」と書かれ、右端上部に朱印と中央上部に割印が押されている。裏面には「明治五年／壬申九月／豊岡県庁」と書かれ、朱印が押されている。寸法は、15.4×10.2×1.2センチで、中央上部に孔があげられている。

本品は、1872年（明治5）に豊岡県庁が発給した商業鑑札である。本コレクションには、同様のものが他に3点（鋳物商・指物職・鋳掛職）ある。書式は同じであるが、奥の番号の冒頭が「器」・「雑」と異なっている。これは、業種・職業などの種別を表す記号であったとみられる。

なお豊岡県は1871年（明治4）の廃藩置県により豊岡藩が県となったもので、同年9月の第1次府県統合で但馬国4県・丹後国4県・丹波国3県が統合されて改めて豊岡県が設置された。しかし、1876年（明治9）の第2次府県統合により、豊岡県は分割されて、京都府と兵庫県に編入された。

3.

表面に「はノ二番／上座壺人／上り」、裏面に「彦根丸」と書かれ、裏面には焼印が押されている。寸法は、15×5.3×0.5センチである。



本品は彦根丸の乗船札であるが、彦根丸は史料上に確認できない船である。そこで注目されるのが、金亀丸である。

金亀丸とは1870年（明治3）に旧彦根藩の奨励補助のもとに建造された蒸気船（18トン、15馬力）である。船名にも彦根藩とのつながりを見ることができる。藩庁が置かれた彦根城の異名は金亀城で、異名を金亀丸は有している。すなわち彦根藩と深いつながりを持つ「金亀丸」こそが、「彦根丸」であると考えられている。

なお金亀丸は、米原－大津間を航行したが、1887年（明治20）に廃船となっている。したがって、本品は1870年から1887年までの間に発行されたものとみられる。

本品は木製であるが、本コレクションには紙製のものもあるので、あわせて紹介したい。

長運丸の乗船券で、寸法は16×5.3センチである。長運丸（8トン、8馬力）は、1873年（明治6）に就航し、長浜－大津間を航行したが、翌年に唐崎沖でのエンジン破裂のため沈没した。したがって、本札は1883年から1884年までの間に発行されたものである。

両品の記載から、座席に「上座」・「並座」の区別や指定用の座席番号などがあったことがわかる。



4 .

表面に「砲具製造所」の焼印、「精密工」の刻印、裏面には「改1148」の刻印、「東京砲兵工廠」の焼印がそれぞれ押されている。表面には「星野繁八郎」と書かれている。寸法は、



7.1×4.5×0.8センチである。上部に紐通しがあること、両面にニスが塗られていることなどから、本品は門鑑と思われる。

東京砲兵工廠は小銃製造所（小銃製造）・銃包製造所（弾薬製造）・砲具製造所（小銃以外の武器製造）の3部門から構成された日本陸軍の武器製造所である。砲具製造所は1872年（明治5）に開業した大砲修理所が1890年（明治23）に改称したもので、鍛工場・木工場・鋸工場・鞆工場・鋳工場・図工場からなり、1893年（明治26）には「精密工場」が新設された。

本品は、測遠機や照準器などを造る精密工場に所属した工人のものと思われる。1923年（大正12）に東京砲兵工廠は大阪砲兵工廠と合併し「陸軍造兵廠東京工廠」となることから、本品は1893年から1923年までに発給されたものと推測される。

おわりに

紙数の都合上全ての木札を紹介することはできないが、以上のほかに入山札・質家符・氏子札・通札・門鑑・会符・米切手などがある。米切手については、本コレクションには紙製のものもあるので、後日あわせて紹介したい。

【参考文献】

- 大津市歴史博物館編『琵琶湖の船 丸木舟から蒸気船』（1993年）
- 佐藤昌一郎『陸軍工廠の研究』（八潮社、1999年）
- 琵琶湖汽船株式会社編『航跡 琵琶湖汽船100年史』（琵琶湖汽船、1987年）
- 風俗絵巻図書刊行会編『蒔絵師塗師両工伝』下（吉川弘文館、1925年）

関西大学博物館 年史編集室学芸員

関西大学 福島学舎の絵はがき

伊 藤 信 明

絵はがきの始まりは、私製絵はがきの発行が許可された1900年とされる。現在でも博物館・美術館の観覧記念品や、観光地の土産として販売が続いているから、120年の歴史がある。その長い歴史により、古い時代の絵はがきは、当時の社会や文化を記録した歴史的資料として、博物館や図書館の収集対象となっている。

関西大学でもこれまでに、学内の風景、博物館の収蔵資料、図書館の貴重書などの絵はがきが発行されていた。時代をさかのぼると、1906年に竣工した福島学舎の絵はがきが確認できる。福島学舎は現在の JR 環状線福島駅北西にあり、天六学舎が竣工する1929年まで存続した。今は市街地となり、跡地に記念碑が建つのみであるから、福島学舎の当時の様子は、古い絵はがきによって知ることができる。

私立関西大学絵はがき



福島学舎の南側を写した絵はがきで、下部には東海道線の線路が写り込んでいる。細部を見ると、画面の右端には、1912年に増築した学舎の一部が写っている。また、正門には「関西大学」の門標のほか、1913年開校の「関西甲種商業学校」の門標が掲げられている。しかし、1914年に正門脇へ建設された図書館はまだ写っていない。このことから、この絵はがきは、1913年ごろの福島学舎の風景を伝えていることが分かる。

関西大学第2回卒業生記念撮影絵はがき



上：関西大学第2回卒業生記念撮影絵はがき
(徳山喜昭氏寄贈)

下：本学所蔵の大判記念写真

明治43年（1910）の消印がある絵はがきで、福島学舎正面入り口前で撮影された、第2回卒業生の集合写真である。本学は1905年に関西法律学校から私立関西大学に改称し、大学科（のち大学部と改称）を設置している。大学部では、1909年に第1回の卒業生を社会へ送り出しているから、「関西大学第2回卒業生」とあるのは、大学部の第2回卒業生のことである。

この絵はがきは関根某が京都の河田直枝・清枝にあてたもので、文面には「この絵はがきは先日お父上様ご来校くだされ候節、失礼いたし写し候ものに候、私の難しき顔あててごらん、

わかったらはがきでお知らせ下さい」と記されている。当時の学校一覧や卒業アルバムを参照すると、差出人は事務を担当する本学幹事であった関根稔（前から2列目、右から3人目）であると思われる。

ところで、この絵はがきとほとんど同じ画面の大判記念写真が本学に残されている。この2点は被写体に対するカメラの位置が違うだけで、同じ人物が写り、どちらにも大阪市西区にあった青木写真館の銘がある。本学所蔵の写真は詳細不明であったが、この絵はがきが寄贈されことで撮影の経緯が判明した。

関西大学学友会自治記念絵はがき



1914年、大学の現状に危機感を持った学生たちが、大学昇格に向けた財団法人への改組や、学生団体である学友会を学生の自治とすることなど、学校組織の改革を唱え母校改革運動が起こった。

この絵はがきは、運動の終結を記念して発行されたもので、スタンプの日付、大正3年(1914)10月30日は、母校改革運動の発端となった学生大会が開催された日である。絵はがきには、福島学舎と、この運動の解決に力を尽くした斎藤十一郎学長と岡村司理事の肖像写真が、顕彰のために載っている。

関西大学運動部記念絵はがき

福島学舎の時代は、学生の課外活動が定着し始める時期で、スポーツでは相撲とテニスが盛んであった。相撲部とテニス部は、古い絵はがきが残されていて、相撲部の絵はがきでは、福島学舎の校庭に設けられた土俵上で、まわしを締めた学生たちが写っている。画面右側に1912



年増築の学舎が見えないので、1910年前後のものと思われる。

関西大学修法会秋季大会記念絵はがき

また、福島学舎ではスポーツ活動のほかに、学生団体である学友会の主催で、主に春と秋に、茶話会、討論会、講演会などの行事が開催されるようになった。講演会は、福島学舎講堂や中之島公会堂を会場に、学術講演会や模擬裁判のほか、琵琶や浪花節などの余興も行われた。この絵はがきは、福島学舎での模擬裁判の様子を写したものであるが、万国旗が飾られているところを見ると、堅苦しい学術的なものではなく、楽しめる内容だったのだろう。



福島学舎の絵はがきは、ここに紹介したデザインのほかにも、色々と発行されていたと思われる。情報をお持ちの方は、年史編纂室までお知らせいただければ幸いです。

関西大学博物館事務室（年史編纂室） 補佐

関西大学千里山キャンパスにおける キャンパスミュージアム構想の展開

石 立 弥生子

関西大学博物館では、2017年度から中期行動計画に「学内施設（建物）を活用したキャンパスミュージアム構想の展開」を掲げ、キャンパスにある建物の普及活動に取り組んでいる。

関西大学は、前身となる関西法律学校が1886年に大阪市内に開学し、その後1918年に公布された大学令による「大学」に昇格するために、吹田市千里山に広い校地と整った施設設備を求めた。戦後、経営陣は折々に周囲の土地の買収を進めて校地を拡張し、建築家村野藤吾（1891～1984）による学舎建設を進めた。

村野藤吾は1949（昭和24）年から1980（昭和55）年の約30年にわたって、関西大学で約40棟の建物設計に携わった。千里山キャンパスの4つの学舎群と課外活動のための建物、法人本部と併設学校の学舎、約35万㎡にマスタープラン無しに立てられたという村野の建物群は、起伏に富んだ千里山丘陵にランダムに配置され、その外観だけでなく、壁面のタイルや階段の形なども多彩である。キャンパスの景観にあまり統一感がみられないのは、村野が学舎設計にこめた「個性の伸張」「自然との調和」の願いがあったと側聞する。老朽化に伴って取り壊されたり、改修されたりと、現在では往年の半分ほどになってしまったが、それでも学内随所にある村野建築は飽きさせない魅力を放っており、キャンパスの見どころとなっている。

キャンパスミュージアム構想にいたるまでの前段として、2013年から2年かけて、京都工芸繊維大学美術工芸資料館が所蔵する村野設計事務所旧蔵の関西大学関係の設計図面約2000枚を、本学環境都市工学部建築学科橋寺知子准教授とゼミ生の協力により複写した。また、村野が信頼を置いていた建築写真家 多比良誠氏のご親族から、関西大学関係の写真ネガをデジタル化する許可をいただいた。さらに、松浦莫章画伯が描いたキャンパスの風景画約50点が本学

外郭団体の所蔵となっていることを確認した。2016年の大学創立130周年の際に、卒業生から要望の多かったキャンパスの新旧を検めてもらう景観回顧モニュメントを10基設置したこともキャンパスを見直す契機となった。

これらを使って、まずは2015年度から毎冬季に「関西大学と村野藤吾 設計図・建築写真・絵画」展を開催している。これまでに上げたテーマは次のとおりである。



- 2015年 関西大学と村野藤吾（概観）
- 2016年 第3学舎1号館（1968年建築）
- 2017年 第一高等学校・第一中学校（1953～1980年建築）
- 2018年 簡文館（旧図書館 1955年建築）
- 2019年 誠之館（1962～1963年建築）
- 2020年（予定）円神館（旧専門図書館 1964年建築）

2016年度には、東京都の目黒区美術館の呼びかけで村野ネットワークを編成して、村野藤吾関係の展示会や講演会、見学ツアーなどを、各所で毎春開催することになった。

また、同年度に大阪市の「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪（通称イケフェス）」にも参加するようになり、建物見学ツアーを毎秋実施している。同じ順路にならないように「階



イケフェス2019でのキャンパスガイドツアー
（誠之館3号館と中庭渡り廊下 1962年建築）

段」「タイル」「中学・高校校舎」「茶室」などと見どころを決めて案内している。

どちらも市民の近代建築への関心の高さがうかがわれる行事であり、継続して参加するように努めている。

このように、2016年度までに各所から様々なアプローチを受けて実施した諸事業が、現在実施しているキャンパス全体をミュージアムととらえるキャンパスミュージアム構想の萌芽となったことに気づかされる。

2017年にはキャンパスマップと大学の歴史を融合したキャンパスガイドマップを作製し、翌年にはウェブ版を公開した。ウェブ版では、現在のキャンパス風景だけでなく、村野が建築した当時の建物写真をふんだんに掲載している。博物館のあるあたりは標高53mあり、最も低いところとは28mもの高低差があることがわかるイラストもあり、キャンパスの楽しみ方が満載のマップとなっている。



関西大学キャンパスガイドマップトップページ

2018年度にドコモモ・ジャパン (Docomomo Japan: Documentation and Conservation of building, sites and neighborhoods of the Modern Movement) により「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」として、関西大学千里山キャンパスにおける村野藤吾建物群が一括として選定されたことをうけて、2019年12月7日に選定プレートの贈呈式とシンポジウムを開催した。

シンポジウムでは、人間健康学部の学生がダンスパフォーマンスを行い、建築学科の学生が



ドコモモシンポジウム会場
(KU シンフォニーホール1962年建築)

ガイドツアーの案内補助を務めた。大学のキャンパスは、ただ単に授業を受けるだけの場所ではない。これまでも、学生にもっと自校のことをもっと知って欲しいとの願いを込めて、キャンパスツアーの案内、展示会チラシのデザイン、キャンパスガイドマップの調査など、準備や実施に学生参加を呼び掛けている。



ダンスパフォーマンス「丘陵を臨みて」
人間健康学部 蝶野花さん（原田純子教授指導）
左手に写っているのは、村野藤吾デザインの椅子

関西大学博物館のある建物は簡文館といい、本体は1928（昭和3）年に建築された元図書館本館である。関西大学に唯一残る戦前の建物で、1955（昭和30）年に村野藤吾により西側円形部分が増築され、特徴的な図書館建築様式であるということで、2007年に登録有形文化財に登録された。さらに2018年には大阪府指定文化財の指定を受けている。学生教育の場として活用される一方で、一般市民の立ち入りが可能な博物館は、文化遺産となる建物を楽しんでもらうこともでき、まさしくリビングヘリテージである。

2022年は、関西大学が吹田市千里山にキャンパスを構えて100年となる。これまで村野藤吾の建築物を中心に関西大学のキャンパスミュージアム構想を進めてきたが、学内には、鬼頭梓建築・設計の図書館や千里山花壇跡地をしのぶ景観も残っており、随所に関西大学の変遷や地域の歴史を感じることができる。

今年のコロナ禍で、普段は学生たちで活気あふれるキャンパスは静まり返っている。ただ、豊かな自然のなかに凜としてたたずむ陰影の深い村野の建築物は、学問の修得同様、忍耐をもって現状を乗り越えるべしとの自然な覚悟をうながすようである。友と語り、人生の彩を深める場所として、地域にも愛される環境＝キャンパスミュージアムの存在を知ってもらいたい。

関西大学博物館事務長・学芸員

新型コロナウイルス流行下における 関西大学博物館と博物館実習授業の取り組み

関西大学博物館の開館にあたっての取り組み

関西大学博物館では、2020年度春季企画展「受贈記念 横山滋ガラスコレクション びいどろ・ギヤマン・ガラス展 ガラス器を愛（め）で愉（たの）しむ」を4月1日から5月17日までの会期で開催する予定であった。しかし、大阪府下でも感染者が増加していた新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、博物館も臨時休館することとなり、企画展示は延期とした。その後、大阪府による休業要請の解除を受け、6月1日から対象を学内関係者に限定して開館した。続く6月15日からは一般の方も含め対象者を限定せず開館することとなったが、引き続き感染拡大防止のため、正午から13時半までの間と15時半に閉館した後に換気・消毒作業を実施するなど、通常の開館時間（10時～16時）より短縮しての開館となった。

当館はもともと図書館として建築・利用されていた建物である。それを博物館として開館するために、現在の特別展示室・常設展示室ともに窓を全て塞いでおり、換気できない。また、換気が可能な空調設備等もない。そのため、換気作業は大型の送風機とダクトをつないだ簡易の換気設備を用いて実施した（写真1）。



写真1 送風機とダクトを用いた換気作業

開館にあたっては、発熱や咳症状がないこと、入館前に手洗いを徹底することなどを入館の条件とした。さらに、来館者には入館前に博物館

建物入口に掲示した案内から「関大コロナ追跡システム」ないしは「大阪コロナ追跡システム」のいずれかにアクセス・登録してもらい、万が一の際の追跡が可能ないように来館者に協力を呼び掛けた（写真2）。スマホ等によるアクセス



写真2 博物館建物入口の掲示



写真3 閉鎖した図書閲覧コーナー



写真4 受付に設置したアクリル板

が困難な方には、入館シートに記入していただいた。入館者同士の間接的な接触がないように、受付周りに配置していた各種チラシやパンフレット類は撤去し、図書の閲覧コーナーも閉鎖した（写真3）。受付には飛沫防止用のアクリル板をセットし（写真4）、来館者と博物館スタッフが直接的に接触することがないように配慮した。

このような対策を実施しながらの開館となり、来館いただいた方には不便をおかけすることとなった。今後、現在のような状況が続く可能性が高いことから、引き続き対策を徹底していく必要がある。同時に、来館者の利便性の面からは改善すべき点も多く、今後の課題といえる。（山下）

新型コロナウイルス流行下での博物館実習

関西大学は、新型コロナウイルス流行により、2020年度の授業は当初2週間を休講して、以降はオンラインを活用した授業を実施することとなった。博物館実習の授業は、実技実務実習が主体であるという制約から、リアルタイム配信は行わず、オンデマンド配信に対応した関西大学の遠隔授業配信システム「関大LMS」に、担当教員の授業動画、教材や資料の配信配布、課題の掲示を行った。

今年度の博物館実習授業のシラバスに従い、休講した2回の振替も含めて15週の授業のオンデマンド配信を行った。学内外の状況を見極めて、他の授業に干渉しない5月31日（日）と6月14日（日）、7月5日（日）の3回、関西大学博物館にて、対面で実技実務実習を行った。履修生は、1組（金曜日）14名、2組（土曜日）5名の合計19名である。

2020年度後半の授業は、新型コロナウイルス流行の状況を見極めつつ、当初のシラバスの内容を実施していく計画である。（山口）

博物館実習（2020- 通年 - 金曜日・土曜日：4限5限）				
4月24日・25日	1 週目	ガイダンス	文化財保護法の解説	
5月1日・2日	2 週目	美術資料の取り扱い		
5月8日・9日	3 週目	美術・工芸資料の調書の取り方と梱包の仕方		
5月15日・16日	4 週目	考古資料の取り扱い		
5月22日・23日	5 週目	考古資料の調書の取り方と梱包の仕方		
5月29日・30日	6 週目	お茶と文化		
5月31日（日）		実技実務実習（1）	関西大学博物館実習室・セミナー室・展示室	
		1 時間目	（館長ガイダンス・担当者挨拶・博物館展示室見学）	
		2 時間目	（考古資料の取り扱い）	
		3 時間目	（美術資料の取り扱い）	
6月5日・6日	7 週目	民俗資料の取り扱い・民具調査と採集方法		
6月12日・13日	8 週目	歴史・文書資料の取り扱い		
6月14日（日）		実技実務実習（2）	関西大学博物館実習室・セミナー室・展示室	
		0 時間目	（米田先生ガイダンス）	
		1 時間目	（文書・歴史資料の取り扱い）	
		2 時間目	（文書・歴史資料の調書の取り方と梱包の仕方）	
		3 時間目	（考古資料の調書の取り方と梱包の仕方）	
6月19日・20日	9 週目	展示会企画・ポスター作成／図録編集・出版		
6月26日・27日	10 週目	刀剣の取り扱いの基礎と方法		
6月26日・27日	11 週目	表具の取り扱いと保存技術		
7月3日・4日	12 週目	博物館見学実習について（レポート課題あり）		
		レポート課題：	夏季博物館園見学について 提出期限：10月5日	
7月5日（日）		実技実務実習（3）	関西大学博物館実習室・セミナー室・展示室	
		1 時間目	（刀剣の取り扱いの基礎と方法）	
		2 時間目	（美術・工芸資料の調書の取り方と梱包の仕方）	
		3 時間目	（資料写真撮影の目的と方法）	
7月10日・11日	13 週目	資料写真撮影の目的と方法 展示パネルの作成		
7月17日・18日	14 週目	展示開発ワークショップ		
7月24日・25日	15 週目	博物館実習展指導と展示企画		
		レポート課題：	実習展示企画案の提出 提出期限：9月24日	



写真5 7月5日（日） 対面授業 於関西大学博物館（書画・刀剣）

◆ 博物館だより

◇2019年度関西大学博物館 開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	25	24	25	27	4	23	24	17	20	21	16	12	238
入館者数	1,448	1,583	631	781	3,086	205	469	810	398	260	221	57	9,949

◇博物館では、2017年度に大阪音楽大学から寄贈を受けたSPレコードの整理を始めました。この中には、ベルリンオリンピック男子マラソンにおいてアジア出身で初めてマラソンで金メダルを獲得した孫基禎選手や女子水泳200米で優勝した前畑選手の実況録音などが含まれています。孫選手は、本学OBである大島健吉氏と交流がありました。さらに、館蔵資料の調査研究を進め、その成果を広く公開するために2020年10月から研究員制度を立ち上げます。

◇緊急事態宣言の発出など新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、今期は6月開催予定の展示会と講演会、ミュージアム講座、博物館実践実習研修会、春学期SPレコード演奏会、8月のキッズ・ミュージアムなど、毎年好例の諸行事の開催を中止せざるを得ませんでした。また、4月5日のスプリング・フェスティバル、5月17日の教育後援会総会も取りやめとなり、学内見学も中止しました。これに伴い、4月5日開催予定であった「村野藤吾建見学ツアー」も中止といたしました。そして、6月開催予定の校友河内國平刀匠による日本刀展とこれに関連した講演会、ミュージアム講座等は広報活動すらできない状況でした。日本刀展は、来年の春学期に開催する予定です。

◇博物館の臨時休館に伴い、2020年度春季企画展「受贈記念 横山滋ガラスコレクションびいどろギヤマンガラス展—ガラス器を愛で、愉しむ—」（4月1日から5月17日までの予定）を十分な安全対策を図った上で、開催期間を6月1日から7月31日に変更・延長して開催し、558名の方にご覧いただきました。



・ ・ ・ 編集後記 ・ ・ ・

表紙の「ビーズ飾り蓋付菓子器」は、無色と紫のガラス管に針金を通し、緑、黄、褐色のビーズを編み込んで木瓜形もっこうの菓子器を造形しています。江戸時代後期に江戸・芝神明周辺しばしんめいのギヤマン問屋が製作販売した作例と推定されます。

横山滋ガラスコレクションの受贈を記念して、近世の和ガラスや和製ギヤマン、輸入ガラスなどの名品を約200点厳選してお披露目しました。新型コロナウイルス感染症感染防止のため、外出が自粛される中で、熱心な来館者の方々が訪れました。

2020年9月末にて、第7代博物館長 米田文孝文学部教授が、退任いたします。在任中の関係各位のご支援ご厚情に感謝いたします。10月からは、西本昌弘文学部教授が博物館長に就任いたします。前館長同様、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。



(写真：アートビジョン 加藤 成文)